



1989年(平成元年)
12月号(No. 534)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150円

目次

- マッキンリーの猛風…広瀬 潔…(1)
- 平成元年度自然保護委・全国集会(3)
- 海外の山…(4)
- 「ヒマラヤのロシア人画家」
- 東西南北…(6)
- 「ヒマラヤ・アドヴェンチャー・
- トラスト発足」「山岳空撮、ト
- リノで個展と国際写真展開催」
- 他
- 追悼 野口秋人氏、田辺主計氏…(8)
- 図書紹介…(9)
- 「一等三角点の名山100」「太平
- 洋地域環境問題論考集」「村井
- 米子追悼集、川森左智子追悼
- 集」「遙か久恋の峰」
- 報告…(11)
- 「台湾の山岳協会を訪ねて」「三
- 水会例会山行」「蝦夷お月見会」
- 会務報告…(12)
- 新入会員、住居表示…(14)
- ルーム日誌…(15)
- タンボチェ僧院再建協力募金者
- ご芳名…(15)
- お知らせ…(15)

マッキンリーの猛風

広瀬 潔

はしがき

今冬山田昇隊三名が遭難。五年前植村直己が登頂後行方不明になった時と、同じ厳冬二月。場所も「標高五千が付近」と同じ。ともに「気象遭難」と推定され、主因は「風」といわれている。両者とも超一流の登山家だったので、岳界に与えた衝撃は大きい。

厳冬の登山と風

標高六一九四。八千級のエベレストに比べると低いが、北米大陸の最高峰で、北極にも近い。景観が優れているので、夏季は多くの登山隊が来るが、冬季は気象が厳しく恐れられ、今までに登頂した登山隊は僅か七隊に過

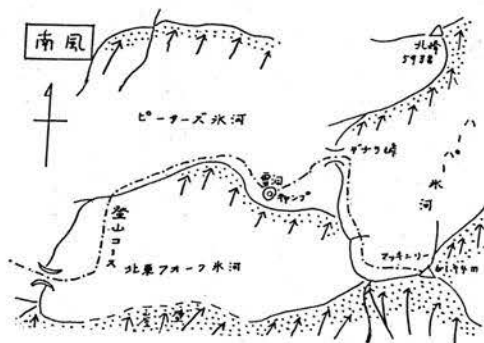
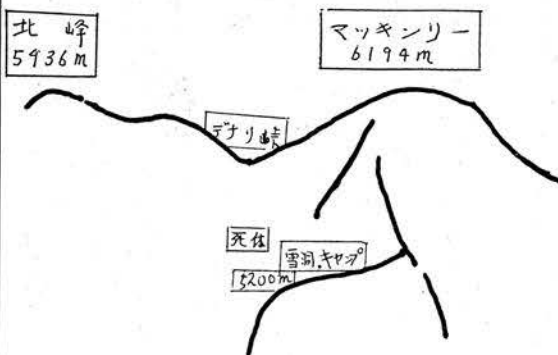
ぎないとか。

厳冬の「風」については、山中に気象観測所がなく、実体はよく分かっていない。

小型で強固な気象観測用に造られた飛行機なら、荒天の山中でも飛べるが、長期継続して観測を行った記録はない。気象衛星よりも高精度に造られている「アメリカ軍用衛星」だったから、雪煙などの現象をとらえて、その地点の「風向風速」を推定出来るが、これも雲にさえぎられない晴天時に限られる。

山稜に、エエロベーン(プロペラ型)の風速計で、特に目盛り幅の広いもの

を取りつければ、悪天候時の「瞬間最大風速」も測定出来るが、「取りつけ作業の困難」と「資金関係」から、実現されていない。そんなわけで冬季悪天候下の「風の



A 図

「どのような気流になるのか」、また「局地的にどのような風が吹きまくるのか」は、おおまかではあるが、地形図からある程度推測出来る。試みに自由大気中の「東西南北」の各風が山体

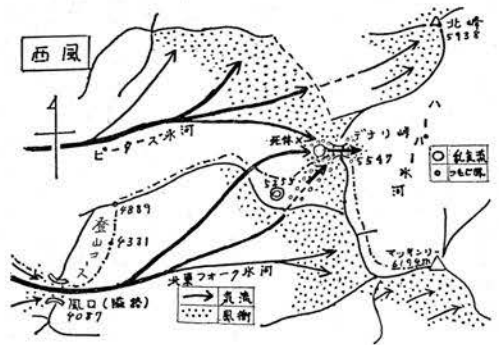
▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日 13時～20時

●年末年始の休み
12/29(金)～1/5(金)

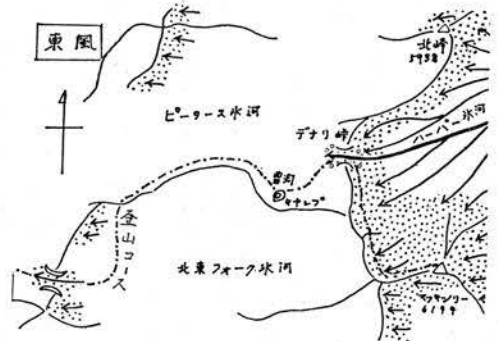
「風」が山体に当たった場合、山中では上空五千の辺のを模索地形図から「風」を模索

お知らせテラフ電話

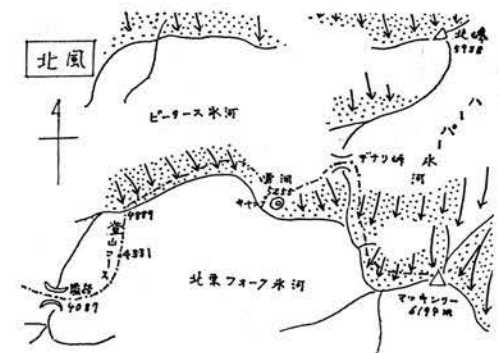
234 六六五九



B 図



C 図



D 図

に当たった場合について、それぞれ「風系概念図」を作成してみた。(注―簡素化したので、「山越え気流」などは省略してある)。

何分北極に近く氷河による侵食が高度に進んでいるため、地形は至って複雑。その影響を受けて、「気流」や「風」の歪みも顕著。

(A) 南風の場合

登山コースが「風衝箇所」を避けているので、比較的安全といえる。

(B) 西風の場合

西風が強い時は、「デナリ峠」と「その西斜面」が、非常に「危険状態」に陥る。

「ピーターズ氷河から上昇してくる気流」と「北東フォーク氷河から上昇

してくる気流」が合流して、乱気流状態となり、「突風」や「つむじ風」が発生しやすい。特に峠直下の急斜面で気流が急激に上昇するため「竜巻状乱気流」も起りやすい。自由大気中の風速が五〇位でも、気流は峠に向って収斂されるので、風速が著しく増強され、一〇〇位近くにもなる。まして「つむじ風」や「竜巻状乱気流」に襲われれば、登山者は一〇〇以上の猛風に翻弄される。

(注―昭和四十七年十一月富士山吉田口五合目付近で、岳貴山岳会が乱気

流に襲われ、隊員十名がはいったまま、

キャンプが空中に吸い上げられた。近くに落下したが、全員重軽傷を負った。また隣りの国学院大キャンプは高

く吸い上げられ、隊員四名のうち三名は遠く二〇〇位も飛ばされて落下。一名死亡、二名重傷を負っている。)

マッキンリーでも、デナリ峠付近が強い「西風」を受けた場合、登山者はこれに似たような烈しい乱気流に巻きこまれる危険が多分に考えられる。

(注―山田隊は二月二十三日峠から西斜面を約二〇〇位のところを下降中、風のため滑落、斜面下方で死体が発見されているが、この時はやはり「強い西風」だった、と推測される。)(図中×印が死体発見地点。)

(C) 東風の場合

「西風」ほどではないが、デナリ峠はやはり風が吹き荒んで、危険地帯となる。峠から上部頂上までの尾根コー

スも風にさらされる。

(D) 北風の場合

デナリ峠付近は比較的穏やかだが、峠から頂上までの尾根沿いコースは、高くなるほど風が強くなる。

風向変化時の対応策

上記のように、風向によって風衝位置は変わる。従って登山者は、常に風向変化に注目して、その対応策を考える必要がある。

例えば、図中◎印で示した前進基地(五二〇〇位のキャンプ・雪洞地点)が静穏または南風なので出発。頂上近くに達した頃、「強い西風」に変化すると、デナリ峠とその西斜面は激しい乱気流状態となる。帰路を絶たれる危険が大きい。マッキンリー登頂コースはこのような危険が秘められている。

あとがき

本文は、地形図から推測したマッキンリーの「風」だけについて述べたが、また別に高層天気図と高層観測記録から推測した「遭難時の気象状態」を、奥山隊と協同執筆している。近く発表する予定なので、併読して頂きたい。

(付) 山田昇の登山記録樹立計画

優秀な登山家だった山田昇は次の二大登山記録の達成を念願していた。

(A) 世界八千級高峰十四座全部の登頂

記録(うち九座は達成済)。エベレストは冬・秋・春の三回登頂。その三回

目の「日・中・ネパール三国頂上交差登山」で勇名をはせ、日本登山界の第一人者と評せられた。残る八千級高峰五座の登頂に邁進中だった。

(B) 五大陸最高峰冬季登頂記録(うち四峰は達成済)。今回のマッキンリー

登山はその最後の仕上げだった。

(付) 登頂完遂後の遭難か?

山田隊は、「登頂後下山中遭難したのか」、または「何かの事情で登頂をあきらめて引き返し中遭難したのか」、確認出来る資料が残されていない。

遭難は二月二十三日と一般に推定されているので、その日の山田隊の行動をおおまかに推測してみると、次のようになる。

朝五二〇〇のキャンプ(下部は雪洞)地点は「南西風」なので風当りはさして強くなかった。霧がかかっていたが、時々晴間もあるほどで、特に「悪天候」というほどではなかった。で出発し、デナリ峠を経て頂上に向った。何分第一級揃いの実績を持つ充実した登山隊(全員三名)だったから、登攀効率は高く、正午前後には頂上に達していたものと、私は考える(山田隊長は「五大陸最高峰冬季登頂記録」を達成した喜びで躍動していただろう)。下山の途につく頃から、今まで

の「南西風」が「西風」に急変し、風速も急に強まってきた。デナリ峠まで下つてくると、すでに一帯は乱気流状態になっていたので、隊員達は吹き飛ばされないように互にロープで結び合っている、慎重に西の急斜面を降り始めたが、猛風で滑落、遭難死したものと、

報告

「一緒に歩いて山の環境保全を考えよう」をテーマに

平成元年度自然保護委・全国集会

平成元年度、日本山岳会自然保護委員会の全国集会が、十月七日(土)～八日(日)の両日にわたって、戸隠越水ヶ原で開催された。

室内で議論するだけでなく、原点に返って、山を歩いて、環境保全について考えよう、ということである。

I 班 黒姫山登山後、越水ヶ原へ。
II 班 飯縄山登山後、越水ヶ原へ。
III 班 現地集合

の三班に分かれて、七日(土)十七時、越水ヶ原の「もみの木山荘」に集合した。I 班、II 班の登山の報告は、最後に記す。

十月七日(土)は、曇一時雨のため、登山組は、泥だらけで到着。山靴、雨着を洗い、受付け後、入浴。十八時頃、ストーブ暖炉のあるロビーに集まる。

推測される。

五年前植村直己が「冬・単・独・登頂」という輝かしい「記録」を達成した後、やはりこの付近で行方不明になったのと、類似している。

マッキンリーは恐ろしい山だ。

(平成元年八月記)

待ち時間に、横山委員の司会で、簡単な自己紹介をする。

十八時三十五分から夕食。和食がフランス料理風に順に運ばれてくる。

最初に、秋田支部委員として、毎年出席されていた故福田文二氏に黙祷。

ワインで乾杯して、夕食開始。追加注文のビール、ワイン。持込みの日本酒を出して、約一時間の夕食となる。

十九時三十分から同じ食堂で懇親会。チーズなどのつまみが出て、ウイスキー、日本酒、ワインが並ぶ。夜行で来て山に登った人たちがダウンして、部屋に帰る。閉会後も、飲み足りない人、議論し足りない人は、予備室で、飲み会を続行する。

十月八日(日)晴一時雨

八早朝散策。五時半頃から起き出し

戸隠森林植物園まで歩く。途中から雨が降り出した。寝坊組は、暖炉の前で歓談。

八時半頃より順次朝食。焼きたてのパテロールなので、一斉朝食ではなく、居残り組から始まって、帰った順に朝食を取る。部屋に帰って、荷物をまとめ、九時食堂に集合。参加記念品のスカーフ(手造りの緑色ローケツ染め)を女性から配る。事務局から、今回、国内旅行総合保険を掛けたことを説明する。

△自然保護全国集会

一、沢井委員長あいさつ

二、信濃支部、日置委員あいさつ

長野県は広いので、来年は県南部で開催して下さい。

三、松本理事あいさつ。自然保護はこれから多事多難となりましようが、山田会長の、命、仲間、自然を大切に言葉に沿って進みたい。

四、各支部の状況報告

△越後支部・石田委員。巻機山スキー場問題は、住友不動産が計画を凍結したので、一件落着

△信濃支部・日置委員。山岳県なので、リゾート開発、スキー場、ゴルフ場と長野県中が問題である。

○徳高町起点のロープウェイ問題

○燕山荘の浸透式浄化処理施設

○上高地、酒沢でのトイレ有料化問

題(山岳会の意見は?)

○岩菅山、冬季オリンピックのため
のスキー場建設について

△山梨支部・北野委員▽ 高山植物の
盗掘で、手じょうを掛けられる人が
出た。

△京都支部・塚本委員▽

○大文字山ゴルフ場、農薬散布によ
る汚染が心配

○加茂川上流ダム計画はストップ
○小山の散歩道に、自然ではありえ
ない花を植えている

○老若とも、歩いて山に登るように
努めて、林道、ロープウエーを防ぐ

△富山支部・石坂委員▽ 立山に雷鳥
が増えていて。飼では、ウチヨウラ
ン、天然ワサビが全滅した。

△関西支部・中谷委員▽ 傍畝山麓の
マンション建設計画に対して、景観
を守る会を作った。

△山陰支部・小西委員▽ スライドを
上映し、大山の変化を説明。登山
道、山小屋によって土砂が流出。

△福岡支部・松本委員▽ 屋久島のロ
ープウエー計画は今のところ、鎮静
化している。

△熊本支部・本田委員▽ 阿蘇町端辺
の原野にサーキット建設計画があ
る。ツキノワグマ生存の可能性。

△欠席の静岡支部▽ 池口岳山頂付近
の山小屋建設計画の資料を提出

海外の山

ヒマラヤのロシア人画家

十一月初め、氷雨のレニングラードにいた。いつもの
ように気入りのロシア美術館までたどりつく、幸運
にも「レリーヒ展」をやっているところだった。

ニコライ・コンスタノヴィチ・レリーヒ(一八七四—
一九四七)。一九二〇年代、五十歳になってから中央ア
ジア、ヒマラヤ探検に情熱を注いだロシアの画家、詩
人、思想家。日本では加藤久祚氏の「ヒマラヤに魅せら
れたひと」(一九八二年、人文書院)で初めて詳しく紹
介された。

「カシミール」「ナンダデヴィ」「ガンジスの灯」、モン
ゴルのゲル(包いバオ)などの表題が示すように、ロ
シア美術館の特別展示場には、レリーヒがとらえたアジ
アの山岳世界の人と自然が独特の紫がかった藍(あい)
色を基調として広がっていた。

白いヒマラヤの山波を背に、馬に乗って去ろうとして
いる男を頭上に壺をのせた女が見送る場面を描いた絵に
は、「忘れないで」とのタイトルがつけられている。雲
海の向こうにそびえる見覚えのある山は「フジャマ」だ
った。中国の東北部を探検する直前の一九三四年、彼は
日本を訪れている。

少年時代、考古学に夢中になったレリーヒは、ペテル
ブルグ(いまのレニングラード)の美術学校を出てパリ
に留学、本格的に絵を描きはじめてから次第に詩人タゴ
ールをはじめとするインド世界にひかれていく。インド

への憧れは、ロシア革命一九一七年)後も変わることな
く、それはやがてヒマラヤへの憧憬に変わった。

スリナガルを起点に中央アジア大探検を始めたのは、
一九二五年、五十二歳の時である。家族と共にヤク、
馬、徒歩で三年がかりでタクラマカン砂漠を抜け、ウル
ムチからシベリヤに至り、南下してモンゴル、チベット
高原を経てシッキムに帰着する壮大な旅だった。

結局彼は晩年の二十年をインドで過ごすことになる
が、ヒマラヤへの思いは、バンジャブ地方のクルー溪谷
に「ウルスワティ(サンスクリット語で「夜明けの星の
光」の意味という)」と名付けたヒマラヤ研究所を設立
するまでに至った。七千点といわれた作品のうち、二千
点が、山の絵だという。

東欧の激しい変容とソ連のペレストロイカ、そして米
ソ首脳の冷戦終結宣言、などを目のあたりにすると、政
治の波を越えて自分の一生を生きた、こうした知識人の
存在があらためて光って見える。

ところで、ロシアの中央アジア探検家と言えば、ブル
ジェワルスキーをまず思い浮かべるが、先々月号のこの
コラム「山の名、民族の名」でふれた、中国青海省最高
峰の新青峰のロシア語名「モノマハダバン」もブルジェ
ワスキーが命名したもの、と会員の田村俊介氏から教示
を頂いた。

正しくは、「シャブカ・モノマハ(モノマフの帽子)」。
キエフのウラジミール・モノマフ大公がビザンチン皇帝
から受領した由緒ある王冠で、ロシア帝国のツアーのシ
ンボルだったこの王冠にちなんだ命名だった。ご教示に
感謝したい。

(江本嘉伸)

海外の山



自然保護全国集会 (撮影・小西奎二)

△中村純二委員▽「七時雨の風」配布署名簿も

五、A、B、C、Dの四グループに分かれて「山岳会としての環境保全運動はどうあるべきか」について、パネルディスカッション(四十分)。

△A班▽ 国内の細かい問題は他にまかせて、海外登山における自然保護を大切にする啓蒙運動に力を入れる。国内を取り上げる場合は狭い地域だけの問題でなく、全国に共通な問題を取り上げる。政治が関係した問題は山岳会が立ち入らない方がよい。

△B班▽ 山岳会の自然保護の姿勢はサロンの一貫性がない、明確にして欲しい。保護運動の対象と対応

は、地元との交流活動が重要。地域

住民の同意書がないと動けないから、マスコミを利用する。尾瀬の入

山料問題は、金銭的解決は良くない。

△C班▽ 山岳会の自然保護は、原点

に戻って、ゴミ持ち帰り運動など小

さいことの実践をつみ重ねる。各地

の運動は、総論賛成、各論反対が多

いようだ。山岳会としては、圧力団

体的立場(国内では)を取ったら良

い。自然保護に対して、教育、啓蒙

へ力をそそぐ。

△D班▽ ゴミ持ち帰り運動は徹底し

ていない。外国の山に、たくさんの

ゴミを置いてきてしまう海外遠征の

あり方を考えなければならぬ。冬

季オリンピック開催候補地、志賀高

原岩菅山コース計画に対して、山岳

会として純粋に自然保護を優先させ

て、考えるべきだ。

△まとめと質問▽

沢井 海外のゴミの問題は、啓蒙活動

と共に、山岳会自身が実行しなけ

ればならない。

平沢(信濃) オリンピックは都市が

主催するのだが、国家行事でもある。

山岳会として見解を出すのは慎重

にしてもいい。

武田 オリンピックの問題は、抽象的

でもいいから、まとめて欲しい。

六、閉会あいさつ 松本理事 分きざ

みの進行で迷惑をかけました。早

く各地の情報をキャッチしたいと思

っている。全国集会のやり方も試行

錯誤している。来年は、もっと参加

者が多くなるような形で開きたい。

七、昼食、水上氏の話、解散

荷物を持って、車や徒歩で中社に移

動。戸隠ソバの昼食をとる。昼食

中、戸隠を知る会会長、水上寅宗氏

(越水ロッヂ)の話聞く。ステッ

カーを売った資金で樺の苗を購入、

植え付けはボランティアで行った。

十三時四十分頃、沢井委員長のおい

さつ、昼食終了から流れ解散。

(支部参加者) 越後支部・石田国夫。

信濃支部・日置邦、松林のり子、平沢

利夫。山梨支部・北野良一、鶴田健蔵。

京都支部・塚本圭一。富山支部・石坂

久忠。関西支部・中谷絹子。山陰支部・

小西毅。福岡支部・松本康司、吉村健

児。熊本支部・本田誠也、馬場猛。

(一般会員、同伴者) 斉藤敏男、石田

喜八、林田正幹、酒井明徳、茂木洋子、

馬場千代子、篠原明美。(自然保護委

員) 松本恒廣、沢井政信、渡辺正臣、

越智英夫、中村純二、山口俊輔、斉藤

桂、梨羽時春、武田満子、遠藤光男、

池田剛、小西奎二、近藤緑、中村あや、

麦倉啓、渡部温子、横山隆、黒沢秀雄、

渡辺徹、奥野道治、山口悠紀子、以上

会員外を含み四十二名(山口悠紀子)

△黒姫山▽六日夜行発。曇時々小雨。

黒姫駅から、二台の車でピストンし

て、苗畑登山口まで。雨着をつけて歩

き出す。一二〇〇〜一五〇〇(特別

地域第三種)は水ナラが多い。一五〇

〇〜二〇〇〇(特別地域第二種)は

オオシラビソ、コマツガが多かった。

山頂には、通常の二等三角点標石は

なかった。二万五千分の一地図に従い、

山頂から直接、藪にかくされた道を、

火口原に下る。ここは、特別保護地区

となっている。新道が開かれたためか

荒れている西登山道を下った。大橋か

ら車のピストンで、もみの木山荘に入

る。(参加者) 池田剛、馬場千代子、

馬場猛、本田誠也、斉藤敏男、斉藤桂

中谷絹子、茂木洋子、梨羽時春、山口

俊輔、横山隆、黒沢秀雄、山口悠紀子、

他一名、以上会員外含み十四名

(山口悠紀子)

△飯綱山▽

十月七日朝、一行は小雨の中を一ノ

鳥居から歩き始める。登山道の脇に不

動明王が立っている。釈迦如来、文殊

菩薩と、最後の虚空蔵菩薩まで十三仏

あるのを道標がわりに登って行く。あ

たりは紅葉のさかり、時折キノコも目

につく。分岐に出たところで昼食。信

濃支部の日置さんと合流する。飯綱神

社の前で記念撮影をして、さらに飯綱

山頂(一九一七)まで足を伸ばした

が、四周はすべてガスの中。中社への下りは、山麓の樹林が美しかった。

(参加者) 日置邦、小西毅、酒井明徳、松林のり子、松本恒廣、渡辺徹、近藤緑、以上七名 (近藤 緑)



ヒマラヤ・アドヴェン

チャー・トラスト発足

今、日本は無論のこと、世界各地で環境問題が、大きくとり上げられており、あちこちで、シンポジウムも開かれていますが、ヒマラヤもその例にもれず、エドモンド・ヒラリー卿が先頭に立ち、各国の山を愛する方々やヒマラヤのトレッキングを計画している旅行社の方々に呼びかけて、「ヒマラヤと自然を守ろう」という意図のもと「ヒマラヤ・アドヴェンチャー・トラスト (Himalayan Adventure Trust)」の発会式が行われた。

会場は香港のホリデー・イン。期日は十月十四、十五日の両日。出席者は

前記ヒラリー卿の他、このトラストの役員 (Board of Trustees) として、インドからは、この度IMFの会長に就任した、キャプテン・コリー氏 (議長として)、イギリスからはクリス・ボニンソン氏、パキスタンからは、UIAA副会長のミルザ將軍、ベルギーからはUIAA自然保護代表のブルッセル大学教授、ホセ・ヴァンデプーラ氏、ネパールのクマール・カドカ殿下、アメリカのリチャード・ブラム氏、そして日本からは田部井淳子が招かれた。当日はアメリカのリチャード・ブラム氏だけが欠席でしたが、十四日 (土) のダイナー・ショーには香港の財界人二四〇名が出席し、大盛会の発会となりました。

日本からは、委員として香港在住の鈴木郭之氏、岡田氏がボランティアで協力し、ダイナーショーのために、日山協海外委員長の神崎忠男氏がかけつけてくれ、また会員で香港在住の中島寛氏など六名が出席されたので、日本のために用意されたテーブルに空席がなかったことは、大変嬉しく思いました。

いつまでも美しい自然や山を守るために、私達山を愛する者は、当然の義務として、自然環境保護のために力を合わせたいものだと思います。

ヒラリー卿からも、来年はぜひ日本

でという発言を寄せられております。会員の皆様のご協力を心からお願ひし、近い将来、日本でこの会が開催できるようお願いいたします。

自分が登って、見てくれば、もういいという時ではありません。一人一人の力は小さくとも、その力を合わせれば大きな活力になっていくものと信じます。

香港での発会式の報告と同時に、今後、長く自然を守るために、どうぞお力添えとご意見をいただき度く存じます。

(田部井淳子)

山岳空撮、トリノで 個展と国際写真展開催

山田 圭一

昨年の末に、山岳写真研究家の杉本誠氏から、イタリーの国立山岳博物館で個展を開いては、というお誘いがありました。既に本紙に同氏が書かれているように、V・セラ、F・マライーニ両氏の日本展の代りに、今度は日本の作品をトリノにということでした。

もちろんわが国には、すぐれたプロの山岳写真家がたくさんいるので、その中から選んだ方がよいでしょうと、はじめは辞退しましたが、世界中の山々の航空写真を系統的に撮っているのは、私一人だけで、先方もこの点に興

味をもっているからということでしたので、喜んでお引きうけしました。

はじめは二三〇点ほどのプリントを、九月二十七日から展示するからということでしたが、当日博物館に顔を出すと、送った作品の半分ほどしか並べてなくて、ちよっとびっくりしました。しかし詳しく事情をきいたところ、ちよう度同じ頃開かれていたトリノ・フォトグラフィアというビエンナーレの企画の一部として受け入れてもらうために、そうせざるを得なかったということでした。しかし博物館のみの展覧会から、世界で最も規模の大きい国際写真展の一部に格上げしてもらえたことは、たいへん名誉なことでした。

ビエンナーレのトップ・バッターということもあって、当日の記者会見には二局のTVと数社の新聞社の他、山の雑誌からもイタンビューをうけたりして、たいへんにぎやかでした。また同じ場所で開催された、日本テレビが制作したエベレスト登頂のビデオ (一九八八年制作) も好評で、たくさんの人を集めていました。

今度のプリントは、十一月六日までトリノで展示された後、クールマヨールのアルプス博物館で十二月から来年三月まで公開され、その後はトリノに永久保存されることになっています。山岳博物館のアウトディジオ館長も、

トリノ・フォトグラフィアのアレサン
ドロ事務局長も、今後もぜひ日本との
間の協力関係を深めてゆきたい、と強
く希望しておりました。

秋の叙勲

初期のマナスル登山で、科学班とし
て活躍された本会会員(会員番号四〇
〇二番)で、大阪府立大学名誉教授の
中尾佐助氏(73)は、秋の叙勲に際し、
勲三等旭日中綬章、受章の榮に浴した。

スイスアルプス博物館

オープン

東京赤坂、全日空ホテルとなりのC
Sタワー2階に「スイスアルプス博物
館 SWISS ALPINE MUSEUM」が、
一九九〇年一月十一日にオープンす
る。この博物館は、スイス政府観光局
とスイス・クレジット銀行の共同運営
によるもので、観光局となりの一室を
利用している。グリンデルワルトの博
物館や個人から提供された古い登山用
具や写真、パネルなどを展示、日本人
とアルプスとの結びつきを紹介するほ
か、アルプスの総合的な紹介をめざし
て順次、資料をととのえてゆく。開館
記念には、スイス・アルプスの山小屋
を写真パネルで同CSタワービル内に
展示する紹介する予定。

場所は東京都港区赤坂1・11・30
CSタワー2階、スイス政府観光局。
TEL〇三・五八九・五五八八 (大森)

中高年の玉山横断山行

遠藤 京子

台湾の天候が安定する十月末から八
日間、上は六十六歳を含む平均年齢五
十七歳、十二名の隊で、玉山(三九九
七m)へ登ってきた。

今春の中国・青海省・新青峰登山の
準備を手伝ってくださった京都山岳会
会員の方々である。そのお礼にどこか
手軽な海外の山へ案内したいと思っ
ていたからだ。

京都の北西、愛宕山(九二四m)へ
の千回登山がまもなく成就する中井会
長と共に、定年退職後の健康維持のた
め、週一〜二回、登り続けている人や
主婦のグループである。

寝袋、ツェルト、コッヘル、コンロ
に四日分の食糧等、各自十二〜三*の
荷を背負う山行は、はじめてという人
が多い。ほとんどの登山者が来た道を
下山する中、年配者がこれだけ背負っ
て山頂を越え、東側の八通関へ下り、
八通古道を歩いて東埔温泉の湯につか
って帰るといふ私の欲ばった計画を、
クリアできるかと心配して、へばった

人の荷を持つ覚悟で、私一人背負子を
担いで行ったが、幸いにもたいして役
に立たぬまま、全員無事に山越えがで
きた。

台湾の秋は、祝日が十月二十五、三
十一、十一月三日と続く行楽シーズン。
しかも増え続ける若い登山者で名峰は
花ざかり。三五〇〇mの排雲山荘は超
満員となり、外で寝るというハブニン
グもあつたが、わが隊は降る星を手で
すくいながら眠れる幸せに感喜するゆ
とりを持ち合わせた人たちだった。

みんなの朝の脈拍はふだんより六
十くらい多くなっていたが、高山病の
自覚症状なし。中華民国山岳協会指導
員・謝さんのゆっくり安定した歩調に
導かれたおかげであろう。また、この
グループが、玉山登山のトレーニング
のため、薪十*を担いで愛宕山頂の神
社へ奉納を続けてきたことも成功の秘
訣であろう。

なかでも、一番強かったのは、癌の
ため一度は死の宣言を受けながら、十
年生きのびている六十歳の小柄な女性
と、若い頃胃が弱くて仕事もできな
かったという六十六歳の男性であった。
年をとってから始めた登山でも、続け
ていけば、丈夫になれるということだ。
それにしても、大陸の高峰が、台湾
の登山者にもやっと許可される兆しが
見え、コングールやシシヤパンマへの

登山計画が生まれている折、台湾の若
者の登山熱は日の出の勢いである。
日本のたそがれ族登山隊から見ると
羨ましい光景である。

〔短歌〕

加無山・十一月

大橋 克也

今度こそ頂踏まんと加無に來て谷間に
山の目覚むるを待つ

未だ踏まぬ山ありてこそ楽しさを一途
に登り切ることをのみ

還暦のわれをば登りの先に立てベース
の遅きを云わぬ若きら

秋冷えの徒渉に転び着換えたる還暦の
われに似合いしは赤

岩裂けしこの山辿りし者僅か熊よけの
鈴つけて藪漕ぐ

汗と傷に汚れし顔で向い合う道なきを
越えし頂の友

藪漕ぎで擦りむけし頬に西日受け手剛
かりし峯を振りかえり見る

感傷と呼ばれるものかそれもよし手強

き山に登りきし帰路

幾度か追い返されし山なれど現在^{いま}は仲間^なの如く思える

(加無山は、男加無・女加無の夫婦峰で千層にも充たないが、秋田・山形の県境にある人跡粗らな秘峰)

私の山行

「過去と未来と」

早乙女 緩次

私の山行は、少年期の昭和十八年から始まったが、サラリーマンに成って三十年に渡る仕事に拘わる山行も加わるため、物理的に他の人よりも山に出掛ける回数が多い。

仕事の関係で、携わった山よりも、無根が好きで歩いた山の方がはるかに多いことは確かである。

山の本を書くために、故意に登った山もあるが、此れとても好き成ればこそその山行であって、それなりに楽しい思い出ばかりであった。

定年退職を数年後に控え、このさい山行やら旅行の経過を記録に留めようと思い、旧い日記を繙きながら、秋の夜長をワープロに向かって書いていたが、記録の膨大さに今更の如く驚き入った。ちなみに、深田久弥氏の日本百名山

追悼

野口 秋人氏 追悼

東九州支部の野口秋人支部長(会員番号四五一九・終身会員)が十月九日に死去された。同支部は来年、創立三〇周年を迎えるが、支部の創設者としてそれを見届けないまま、さらに八〇歳の誕生日を目前にした不帰の悲しい旅立ちだった。

同氏は明治四十二年十月二十九日、長野県北安曇郡池田町に生まれた。生家から常念岳が正面に見えたという。そうしたこともあって若い時から山に親しみ、旧制の松本高校山岳部在籍中に北アはほとんど登りつくし、新しいルートも開拓した。例えば、昭和六年夏、涸沢から奥又白に入り、池をベースにして前穂の岩にトレースを入れている。「奥又の松高」はそれが口火だったとされる。

東北大学医学部を十一年に卒業、東京大学医学部副手となり、十五年に招かれて別府市・野口病院の医局入り。十七年には初代院長の死去にともない院長に就任、一時、海軍軍医少尉として応召されたが、終戦で復員、すぐに病院を再開、医学博士号も取得した。

十五年当時、大分県下にも山岳会はいくつかあったが、野口氏が来県、そのなかでも古い歴史を持つ二豊山岳会で活動を始めたことは、大分の登山界に近代アルピニズムを注入することとなった。さらに氏は、個々の山岳会の枠を越えた登山人の結集を目指し、日本山岳会への入会をきっかけに大分・熊本・宮崎などの在住会員と連絡をとりあった。

このなかから大分に支部結成の動きが出はじめ、数年の準備期間、つまり入会勧誘期間を置いて三十五年に大分支部設立にこぎつけた。氏は創立時の副支部長から三

十九年に支部長就任、翌年には会員が隣県にも拡大、東九州支部と名称を変更した。

同氏が海外に目を向け始めたのは支部結成直前のヨーロッパ・アルプス歴訪から。やがて大分ヒマラヤ研究会を組織、支部長になるとともに支部を主体に遠征委員会をつくり、四十年にヒンドウ・クシュに登山隊を送った。

以来、最近まで自らも数度にわたってヒマラヤなど広範な地域を歩いた。七十歳でカラ・パタールにも立っている。また、椿についても造詣が深く、新しい品種も生み出しており、花を求めて中国・雲南にも入った。支部長としては温厚な人柄を慕われ、おのずから氏のもとに人が集まった。自然保護にもきわめて熱心だった。

本職の医者としては甲状腺の日本的な権威。手術法の開発などに大きな功績があった。二十六年、野口病院を医療法人野口記念会(財団)野口病院に改組、理事長を兼任する。六十二年には院長を退任したが、最近まで患者を診つづけたほか、日本臨床外科医学会の名誉会員、甲状腺外科検討会の世話人をはじめ、日本内分泌学会、同甲状腺分科会、九州臨床病理学会などの評議員を務めていた。

大分合同新聞社や西日本新聞社の文化賞を皮切りに、五十三年に日本医師会最高優功賞、五十八年に三宅賞、六十一年に厚生大臣表彰。そして昨年、勲五等双光旭日章を受章したばかり。ことし春、運動障害を起こして入院、支部の三〇周年記念行事を気にかけて、一時は持ち直して復帰が期待されたものの、ついに退院できなかつた。

(文責) 東九州支部・梅木秀徳

を引張り出して、どのくらい登ったか？ チェックをして見たら、たった五十三座のみであることに気が付いてガッカリもしている。

それは、私が信州で育ち、信州に縁を食む身の宿命なのかも知れない。

北海道の九座中、利尻岳を目論んだことがあったが、台風に遭い島に閉じ込められてしまった経緯もあり、未だに一座も登ってない始末だ。

東北の山はそれでも稼いでいる方だが、不思議と隣県の静岡・新潟・群馬が意外と少ないのも一因だろう、燈台下暗しであった。

これからは、手近な処から片付けて、熟年は国内遠征登山にうつつを抜かそうと思う昨今である。(十月十九日記)



図書 紹介

一等三角点の名山100

新ハイキング社編

新ハイキングクラブ(SHC)という全国屈指の会員数を誇る登山グループがある。営業の秘密とかで、その実

元会員 田 辺 主 計 氏

十月二十五日老衰のためシルバーヴィラ向山で逝去。九十四歳。明治二十八年(一八九五)四月十一日誕生。

同志社大学英文科卒、三井銀行に停年まで勤務。本会へは昭和八年(一九三三)三月、藤島敏男、田辺多聞(実弟)氏の紹介で入会、会員番号一四三〇。因みに氏の父、田辺郎氏(京都市名誉市民、インクライン創設者、親族の湯本武雄、小熊小五郎氏は本会会員だった。

昭和十五年会報編集委員、昭和十八年幹事、以後十数年に亘り理事、評議員を歴任、担当は主として会報、『山岳』編集と図書。戦時中本会が最も苦況にあったとき、会の孤塁を守った数少ない一人であり、戦後の会再建に当っては所蔵の山岳図書を数多く寄贈してライブラリーの充実に大きく寄与した。

会報、『山岳』、『山日記』等への寄稿も長期に亘って少くない。

ヤングハズバンドの『エヴェレスト登山記』を昭和五年(一九三〇)に訳出刊行したが、本邦ヒマラヤ文献翻訳の嚆矢であった。ハント『エヴェレスト登頂』、パウアー『カンチエンジュンガをめざして』、メイスン『ヒマラヤ』(いずれも共訳)の訳業がある。

多年に亘る本会への貢献並びにヒマラヤ文献の訳業等に対し、本会評議員会は昭和四十九年(一九七四)十一

月、氏を万場一致で名誉会員に推薦したが、固辞して受けなかった。また永年会員の資格を生ずる直前、自らの意思で退会した。

夫人に先きだたれ嗣子なく、シルバーヴィラ向山という老人ホームで誰に見とられることもなく永遠の眠りについた。葬儀告別式は僅かに本会員四名、遺体は二名の旧友立会いのものと茶毘にふさるというまことに田辺氏らしい最期であった。

氏の本会入会前の登山については不明だが、入会後の主な登山に次の如きものがある。

昭和九年四月 大目岳、早乙女岳、薬師岳
同 十年五月 立山周辺

同 十一年五月 蓮華温泉から朝日岳
同 十二年四月 飛騨側から双六池小舎、野口五郎、烏帽子

子縦走および猿倉から杓子尾根登攀
同 十三年三月 小谷温泉から雨飾山、乙見山峠越え

同 十五年四月 大滝山付近と乗鞍岳
同 十五年十月 島々から久々野へ峠越え

同 十六年四月 小谷温泉から金山、焼山を越えて笹倉温泉へ

同 十八年五月 小谷温泉、小日向山
なお戦後はまったく登山をしていなかった。

(望月達夫)

追悼

数は不明だが、会員番号は二三三二六(十月現在)となっているから、恐らく全国最大規模の登山クラブではなからうか。クラブカラーは黄色。登山者なら必ずその姿を駅頭や山で見かけるはずである。もちろんその名前からし

てハイキングが主体であって、先鋭的な登山はやらないが、人材は豊富でいろんな分野で幅広い活動を行っている。本書の一等三角点を探るハイキングもその活動のひとつとなっている。本書はそのクラブの母体である新ハ

イキング社の選書第九巻で、全国に散在する一等三角点九六八点のうち、その所在地が山頂(正確ではないかも知れないが)で、かつその山が名山と目されるもの一〇〇を選びその紀行とガイドを兼ねて記したものであり、一山

ごとに文章の終りに交通、コース・タイム、宿舎、照会先が掲載されていて便利である。

執筆陣はクラブの有力なチーフリーダーである安藤正義、市川静子、多摩雪雄、富田弘平、松本浩の五氏であり、いずれも最近、実際に自分の足で登り調査したものだけにその情報は信頼性がある。また巻末に多摩、富田両氏による島の一等三角点も取り上げられているのは、いかにも「三角点マニヤ」の発想らしくほほえましい。

さて、名山の選定であるが、これはなかなか難しかったと思う。名山の定義はさておいても、第一、名山であっても一等三角点がない山は駄目という制約があること(富士山は二等であるから本誌にはない)、それに先に同社が出版した『一等三角点の山を歩く』に掲載された八十山を除いているからさらに苦心がいったと想像される。その結果は北海道十五山、東北十八山、関東・甲信越二十四山、中部・近畿十九山、中国・四国十山、九州・沖縄十四山となっている。ちなみに、深田百名山はそのなかに二十六座が入っているのみで、それだけに、やや特異な山が選ばれているわけである。筆者もかなり山に登っている方だと自負しているが、残念ながら本書の山のなかで登踏したのは僅か五十六座に過ぎない。

読後の感想は執筆者のうち紅一点の市川静子氏は本会々員でもあり、カムイク、狩場、摺古木、大崩といった遠方かつ比較的難所の山をこなしている点に敬服した。とにかく百名山ブームの昨今、また遊び心、詩心を誘う一つの指標としてのよき案内書ではなからうか。

平成元年八月一日、A5版、新ハイキング社発行、本文三三一頁、定価一六五〇円 (小倉 厚)

太平洋地域環境問題

論考集

日本環境協会刊

日米民間環境会議から発展して、一九八七年に第一回太平洋環境会議が名古屋で開催され、第二回の会議が今夏(一九八九年)アメリカでの開催を前にして、資料収集・調査研究を行ったものを『太平洋地域環境問題論考集』としてとりまとめたものである。

内容は、地球規模の環境汚染とくに越境環境汚染に対する国際法的対応、自然保全に関する国際条約、協定、開発途上国の債務の自然保護払いの協定問題、中国における環境問題の法律、オーストラリアの森林問題、環境法等、持続的開発のための組織化についての韓国・マレーシア・フィリッ

ピン・タイ・米国の五カ国の比較などである。このほかアジア太平洋地域の林業についてのいくつかの問題、マンガローブ林の破壊、熱帯林の移動式農業、熱帯/亜熱帯林の商業開発、燃料としての森林資源(マキの需要)、植林の新たな可能性(荒れ地の再植林)、貴重な種の消滅、水源域の荒廃(低下した水源機能の回復)などがある。

日本国内では、宍道湖・中海の淡水化、干拓事業についての資料、それと、この論考集の中でも、私達山岳会の自然保護活動とも深く関連があり、一読する価値があると思われるのは、日本野生生物研究センター理事長のさとしたいしちろー氏の論説である。表題は「森林だけを見てもどうにもならない」で、今なぜ森林か……森林をどのようにとらえるかは、時代と場所によって異なる人々の暮らしにかかわっている(都市に住む人対森林に接している人)。森林そのもののいとなみ(物資エネルギーの流れ)、自然生態系の一部としてのヒト、自然の系と人工の系のかかわり、人工の系の拡大と森林の変化、人工の系にとりこまれた日本の森林などについてまとめられている。最後に日本の今後の森林の取り扱いについてもふれている。

一九八九年二月 (財)日本環境協会発行(非売品) (高遠 宏)

村井米子追悼集 川森左智子追悼集

日本山岳会婦人懇談会
有志編

この二、三年の間に、村井米子、川森左智子という女流登山家の大先輩が相ついで亡くなった。このほどお二人と関わりの深かった婦人懇談会有志の手で、追悼集が刊行された。

藍色の装丁の『村井米子追悼集』、漆黒の『川森左智子追悼集』、ともに日本山岳会の多彩な顔ぶれに故人の知己を加えた執筆陣で、小冊子ながら心のこもった内容である。

まず村井米子さん。私にとっては十年前か前、自然保護委員会の大台ヶ原視察の折、ご一緒したことがあるのだが、そのときの印象では、お年を召しても「姫御前」という風情の方だった。こんど追悼文を読んで、それも道理と納得できたのである。

明治三十四年、文豪村井弦斎の長女として生まれた米子さんは、大正六年の富士登山を皮切りに、女人禁制の立山雄山に挑んだり、スキーをおぼえて穂高縦走の下山に使ってみたり、女性としてフロンティア精神を発揮する。

昭和二十二年に日本山岳会に入会、二十六年には日本自然保護協会の設立に

参加、以後自然保護を終生のテーマとして大きな足跡を残された。華やかな娘時代や社会人として活躍のあと、晩年は孤独のうちに亡くなられたという。

川森左智子さんは明治四十年生まれ。夫君圓次郎氏の理解のもとに、結婚後も登山技術をみがき、前穂高奥又白側第四峰フェース(日本登高会ルート)初登頂、北穂高第三尾根登攀などの快挙をなしとげる。戦後、村井さんと同時期に日本山岳会に入会、昭和三十三年にはマッターホルン、モン・ブランなどに登頂するという輝かしい経歴の持主であった。

二つの『追悼集』を読んでみて、共通して言えることは、ともに進取の精神をもって男性に伍して生きられたこと、それでいてもっとも女性らしくお料理の世界にも造詣が深かったこと。

そうしたお二人の素顔が、数多くの方々によって描き出されている。行間から明治生まれの両先輩の心意気を感じとれるように思った。若い女性会員には特に一読をおすすめしたい。

平成元年八月、日本山岳会婦人懇談会有志刊、村井米子追悼集一〇五頁、川森左智子追悼集一〇四頁、頒価各一〇〇〇円(送料二一〇円)

(近藤 緑)

遙か久恋の峰

―チベットの・カント峰
初登頂の記録

同志社大学カント峰
登山隊編著

一九八八年三月、同志社大学登山隊はチベット南東部のカント峰(七〇五五m)の初登頂に成功した。本書はその公式報告書で、副題からそれがはっきりする。

同志社大はネパールのアビ、サイパル、ダウラギリI峰、中国では四姑娘山、ナムナニなどと、ヒマラヤ地域でユニークな登山を行ってきた老舗の山岳会であることはいままでもなく、カント峰もその延長線上にあって、面目躍如たるものが報告の隅々にうかがわれる。

その報告はオーソドックスなスタイルで編まれている。「登山」はベースから初登頂までを扱い、「ギョラパン・踏査」はカントまでのアプローチと、その周辺の踏査をまとめる。「學術」では、珍しいタンドウク寺の真珠のタンカ、少数民族のロパ族とその言葉などについて述べる。最後に「研究・資料」ではカント山群のこと、地図と文献、そして各担当の報告や日誌などが続く。

カント峰は、いわゆるマクマホン・ライン上にあつて、中印国境の微妙な位置にある。そのため、許可を得ながら、中国当局から計画実施を半年延期させられたのだ。戦前に二、三の探検隊がこの地域に入つてはいたけれど、外界には、やはりまだ未知の地であり、地図の空白部である。本書は登山はもとより、二四頁のカラー口絵写真と豊富な本文中の写真と共に、この地域の貴重な資料となる。

なお、巻末の労作、四八×六八mmの大付録地図「東部ヒマラヤ周辺水系図」(約五八万分之一)は、水系図とはいへ、主要道路が入っていたなら、その価値はいっそう高まったものと思う。

一九八九年七月、B5判、二一九頁、毎日新聞社刊、定価六一八〇円

(薬師義美)

報告

台湾の山岳協会を

訪ねて

織田沢美知子

中華民國山岳協会の創立四十二周年記念と安全登山指導センター開設の式典が、十月十四日開催されるに当り、会長の代理として式典に出席しました。私にとって台湾は二十数年前、玉山(新高山)登山に出かけたのがきっかけで多数の山のお知り合いがあり、続けていた文通のおかげで何となく身近かに感じられる処です。

今回は台湾の山登りで交誼のある日本山岳協会・山岳会が招待されており、会員の方々も多数の参加で会場は満員の盛況、招待者の紹介、祝辞、記念品贈呈と式は進み、招待者紅一点の私は目立つ存在で冷汗がドット出る思いがしましたが、無事に大任を果して参りました。

翌十五日、中華民國七十八年団体越野健行大会(五*の米を背負つて三〇*の行程を歩く)に参加し、四千人近い参加者に混つて歩いてきました。途中検印所が五ヶ所あり、検印の度に親しみの声をかけられ、励ましを受けて完歩することが出来ました。八十歳過ぎの年輩者から一歳未満の赤ちゃんまでが参加するファミリー的な強歩で親近感のもてる良い体験をしました。

山岳協会の方々にはいろいろな面でお世話になったことを感謝しております。会の益々のご発展を心よりお祈りしております。以上ご報告します。

三水会例会行

秋の瑞牆山

平成元年十月十四日・十五日

マイクパスで入った金山平は穂芒

の波で輝くばかりであった。木暮理太郎翁のレリーフの立つ白樺林の散策から有井館へ戻り、手打そばの昼餉を済ませると直ちに出発。旧道を行く筈が何時のまにか車道ばかりを歩いて金山峠を越え宿の瑞牆山荘へ着いてしまった。

翌朝は七時に出発して朝日の差し入る白樺林の防火線をゆくり登った。

富士見平で一服し、金峰への登路から左へ入り、小川山への分岐を右に見送って木暗い径を下り天鳥川源流を涉った。暫くは原生林の中の急登が続く、目標に仰いできたヤスリ岩の岩峰が間近になると懸垂下降の音がふつて来た。近づくにつれて峨峨とした岩峰とばかり思っていた岩群も、金峰の五丈岩の様な円みを帯びた滑らかな岩の累なりである事が判り、深田さんの『日本百名山』に「瑞牆山を麓の村では以前瘤岩と呼んでいたそうである」とあったのを思い出した。突き立った、ヤスリ岩を左に見て岩の間を登り、主峰の裏側を右へ廻り込んで釜瀬川からの径を併せると、もう頂上で、予定通りの十一時だった。俄かに湧き出た雲が我々をすっぽり包んでしまったが、それでも時折覗く青空の中に金峰、小川山を間近に望む事が出来た。三角点のある頂上の大巖は三、四十人で満員、早々に昼食を済ませると往路をその儘

に下山した。黒森を経て葦崎へ向かうマイクロパスの窓に奇岩乱立の瑞牆山の全容が秋の日に輝いていた。

(参加者) 高田真哉、坂倉登喜子、鈴木正俊、木村俊博、川上光久、遠田栄、遠田篤子、乾能尚、岡野修、河合文恒、小林碧、他九名 (小林 碧)

瑞牆山 五句 小林 碧郎

啄木鳥や白樺黄葉黄昏れて
蒼天を衝く岩峰の粧へる
瑞牆山巖紅葉して群れ立てる
秋天の巖に懸垂下降つぐ
突元と巖暮れ残る稲架の上

蝦夷お月見会

北海道支部

北海道支部の観月会は、回を重ねて十八回となる。今年は、昨年に引続き岩内町森林公園のニセコいわない国際スキー場を、お月見会処とした。

岩内町は、有島武郎の『生れ出づる悩み』の名作モデルの故郷で、ニセコ積丹小樽海岸国定公園の景勝の地、ニセコ山系の西端、標高一〇八六の岩内岳の北斜面に、全長三、七百里のロングダウンヒルは、日本海を望みなからダイナミックな滑降を楽しむスキ

ー場があり、すぐ下に温泉も湧出してあるリゾート地である。

今年のお月見は、九月の連休と重なり、また国体山岳部門が、ここ岩内近辺を舞台に催されたので、十月十四日(土)旧暦九月十五日の観月会となった。

岩内の佐々木会員が総隊長で、スキ一場ロジの前に大テントが備えられ三浦集会担当委員の司会で、お月見会が始まる。威勢よくお餅搗きが行われ雑煮、お汁粉、黄粉、納豆、鬼下し餅に、例によってチャンチャン焼は、鮭に次いで山女も登場大好評である。

親子井は、イクラと鮭で次々とお変わりとなり岩内の木村さん大忙しである。

月は、中天高く冴え、日本海に照り返っている。誠に結構なお月見会であった。翌朝は、鮭や秋刀魚、南瓜、猿梨酒等海産農産物のセリ市には、山岳会手拭や酒杓まで盛り沢山。帰路は目国内岳登山に、ニセコパノラマラインや積丹カムイラインドライブは、紅葉の美しい素晴らしい北海道の自然を満喫した行事であった。岩内の皆さんの心尽しに紙上をかり深甚の感謝を申し上げます。

(参加者) 小林年、佐々保雄、喜久恵、野田四郎、三浦勝幸、郁子、井出雅人、高橋努、内山卓也、久保田優一、石崎貞子、亀井秀子、平野明、牧野洋子、

石井忠雅、笑美子、水科行雄、高沢光雄、浅利欣吉、山川力、赤石喜恵子、高橋桓志、星原しおり、河村皆子、沼崎勝洋、茂木義明、高見茂、桂子、佐々木善民、比企伊佐巳、佐々木利幸、倉嶋宗興、桜居正美、木村富貴子、斉藤繁、斉藤勉、阿久津英一、千葉寛

(平野 明)

会務報告

十一月理事会

十一月九日 十八時三〇分

場所 本会会議室

出席者 山田会長、村木、藤平両副会長、松田、西村、重広、織田沢、早坂、小林、入沢、穴田、小倉、関口、松本、伊丹、石橋、藤本、藤井の各理事、太田監事、小倉、鳴原、橋本の各常任評議員、奥原評議員、沢井自然保護委員長、小倉山研委員長 以上25名
委任出席 飯野監事、平林、大森、大島の各常任評議員

●開会に先立ち、去る六日死去された古市評議員の通夜が、この時刻に行われているとの説明があり、出席者一同黙祷を行って議事に入った。

会長挨拶

十月二十八、二十九日の両日の全国支部懇談会山陰集会は全国各支部から一八〇名の参加を得て盛会であった。

改めて準備設営に当たった山陰支部に御礼申上げたい。

昨八日の午後には、赤坂御所を重広常務理事以下六名の第一線クライマーで訪問し、最近の情勢につき皇太子殿下にご説明申上げた。殿下も大変お喜びの様子であった。

議事

(1)本年度名誉会員推薦の件

橋本常任評議員より、十一月六日開催の評議員会に於て、本年度名誉会員として、今西寿雄前会長、篠田軍治元関西支部長の二名を推挙することとした旨の報告があり、これを了承した。

(2)岩菅山冬季オリンピックに関する要望書提出の件

自然保護委員会より提出方要望のあった本件については、正副会長で協議し、前向きに検討をすすめていたが、地元信濃支部より、要望書の文面等につき意見があり、奥原評議員より、地元要望が述べられ、その結果、本会としては、岩菅山は、登山の見地からしても重要な山なので、オリンピックコースは現在の施設を利用して開催して欲しい旨の要望書を、関係各官庁、長野県、長野市、日本オリンピック委員会宛提出することを決める。

(3)上高地山研改築の件(石橋・小倉)
国立公園内に工作物を増改築する場合は、従前の規模を越えないものに限

るという環境庁の指針があるが、十月二十一日山研閉所に際し、挨拶に立ちよったところ、七月三十日に提出した当会の改築案については、特に問題はないとのことであった。本会としても外国人登山家の交流の上で必要なので、そろそろ資金の準備にかかる必要があるので検討願度い旨の提案があった。

(4)上期監査報告の件

太田監事より十月二十二日、飯野監事と共に監査の結果、適正且つ正確に処理されている旨の監査報告があった。なお本会の会計も以前と違い予算規模も大きくなっているため、理事各位におかれても、そのつもりで予算執行にあたり留意して欲しい旨の要望が述べられた。

(5)中華民国山岳協会創立四十二周年並びに安全登山センター開所式報告の件
出席した織田沢理事より、大変喜ばれた旨の報告があった。

(6)委員会報告

●会報(小倉)

編集の状況は十一月号を以て、概ね遅れをとりもどした。

●自然保護(松本)

前記岩菅山の要望書の他に委員会では、尾瀬の入山料の問題を討議した。

松田理事からは「Himalaya Adventure Trust」の会合が、香港でヒラ

リーの提唱により行われ、日本での開催につき、強い要望が出された」旨の説明がありヒマラヤの自然保護問題は、避けて通れない状況になってきているので、この点についても検討願度い旨の発言があった。

●高所登山(重広)

十一月十七日に委員会を開催し、ナムチエバルワの研究など大きな目標を立てていきたい。

十二月十二日・十四日フィレンツェで開催される Montagna Adventure 2000 には日本から、田部井、重広、神崎の三名が参加の予定。

●青穂・学生部指導(早坂)

十二月六日、立正大学のウルグ・ムスタダ、農大のナンガバルバット、カトマンズ・クラブのエベレストの報告会を行う予定。

なお、青穂の在り方につき、先般来、議論を重ねてきたが、青年部の様な名称に変更してもよいかとの質問が早坂理事よりあり、これに対し村木副会長より、名称の変更等は、自分達で納得のいく名称に変更することは一向差し支えない。青年部の活性化は山へ登ることしかないの頑張って欲しいとの激励があった。

酸素装備なども会で常備する様にした(ヒマラヤへでかける上で、一番困るのは酸素がすぐに間に合わないの

で)。

●婦人懇談会(穴田)

一月に婦人の将来について考えることにしている。

●遭難対策委員会(小林)

十月三十日、デュボン・ジャパンのガモバグ(急性高山病緊急処置用バッグ)の説明会に出席したが、ソフトで小さくためたので研究してみたい。

●集会(入沢)

裏妙義の現地集会は二十八名の参加者があったが高齢者が多かったため、時間がかかり完走できなかった。

高郷山荘に対し、会としても公式に援助すべきではないかとの提案があったが、本件は会の山小屋に関するポリシーに関するところでもあるので、慎重に検討することにする。

●総務(藤井)

本年度の年次晩餐会は十二月二日予定通り開催の予定で準備をすすめているが、来年度の計画についても、会場も含めて、アイデアがあれば考えて欲しい。

なお十二月十六日は、新入会員を対象とした会員懇談会を開催の予定。

(7)其の他(藤平)

●立山の芦峰寺に立山博物館が平成三年度に完成の予定であり、図書については田中栄蔵氏の蔵書を譲り受けることにしているが、フィルム・ライブラ

リーその他の資料につき協力願ひ度い
旨の依頼があった。本件については、
会の資料委員会、フィルム委員会が協
力することにする。

◎入会承認者

久保田直之氏他十六名の入会申込を
承認する。
(Y・M)

評議員会

日時 平成元年十一月六日(月)

場所 日本山岳会会議室

出席者 山田会長、村木副会長、小倉、

大島、鳴原、橋本各常任評議員、広

羽、川上、杉野目、日下田、沢村、

吉村、大塚各評議員、松田常務理事

委任出席 藤平副会長、平林、大森

両常任評議員、山野井、今西、古市、

室賀、奥原、井上、河野各評議員

議事

定款第二十六条による定数確認後、
定款第二十五条第二項に基づき、議長
として小倉常任評議員を選任の後議事
に入る。

第一号議案 名誉会員推薦の件

会長の元に寄せられた候補者とし
て今西壽雄前会長、篠田軍治元関西支
部長の二名につき推薦方申出があり満
場一致で両会員を本年度の名誉会員と
して推薦することに決定した。

第二号議案 その他

本年度永年会員になられる方は次の
二名である。

会員番号 一七七七番 橋 真翠
 (一九三九年五月入会)
 会員番号 一七九二番 川崎堅太郎
 (一九三九年十一月入会)

・ルム日誌

(10月)

- 2日 総務委員会
- 3日 婦人懇談会、自然保護委員会
- 4日 高年対策レクチャー 講師関口
- 11日 常務理事会、理事会
- 12日 図書委員会
- 16日 総務委員会
- 17日 山研委員会、資料委員会
- 18日 三水会
- 19日 科学委員会
- 20日 監査
- 21日 図書交換会
- 23日 フィルム委員会、学生部、支部
- 24日 連絡委員、集委会
- 25日 自然保護委員会
- 26日 学生部
- 31日 「山岳遭難に関する討論会」
 婦人懇談会
 10月来室者420名

会員異動 10月

物故
 吉村健次郎(八一九二) 10・7
 野口 秋人(四五一九) 10・9
 終身会員へ

佐々木淳義(三六七九)
 井上 公利(四九六四)

タンボチエ僧院再建協力

募金者、芳名

十万円—今西壽雄。五万円—高尾徳繁。二万円—宮下秀樹、阿部和行、山田二郎。一万八千円—中村テル。一万円—勝見雅子、長谷川恒男、長田正行、菅沢豊蔵、鹿野勝彦、坂倉登美子、西堀玲子、尾上昇、古市義孝、赤羽孝一郎、室賀輝男、平林克敏、山本良三、広谷光一郎、種谷由美、伊丹紹泰、早坂敬二郎、織田沢美知子、重広恒夫、原蕃、村井龍一、若林啓之助。五千元—上野文子、中島道郎、麻生文枝、川上隆、土肥正毅、早川瑠璃子、大島輝夫、増江俊三、山野井武夫、秋田支部、戸谷翠、青柳かおる、村田省一、桑田結、林桂子、飯野亨、丸茂キクエ、袴田道孝、山本治美、金沢守恭、錦織英夫、高良博人、島汀子、河野之保、杉野目浩。三千元—小田哲夫、岡部みち子、大原照代、藁科光雄、一千元—神谷凡夫。十月末現在累計九十六名、九十五万八千円。

募金振込先
 銀行振込 協和銀行市ヶ谷支店 普
 通預金 口座番号 三六五四六六
 郵便振替 東京七—三〇六〇—
 口座名義は銀行、郵便振替共に「タ

ンボチエ僧院再建協力会」です。
 (お知らせ)

◎冬期マッキンリー登山と

気象遭難講演会

冬期マッキンリー登頂者木本哲氏、
 かもしか同人大蔵喜福氏、日本気象協
 会調査役奥山巖氏らをお招きして、ス
 ライド付講演会を開きます。ご参加下
 さい。

記

日時 平成二年二月十七日(土) 午後
 一時半より五時まで

場所 日本山岳会ルーム

会費 五〇〇円(予稿集、コピー代)
 科学研究委員会

◎現地小集会「加波山」

石碑に立ちどまりながらののんびり
 静かな常陸の山歩きです。

集合 平成二年二月四日(日) JR
 常盤線 土浦駅中央改札 午
 前八時五十五分

コース 土浦駅(バス)→樺穂→三合
 目→加波神社親宮→本宮→一

本杉峠→弁天前→樺穂

歩程 約四時間三十分

バス代(土浦→樺穂往復)

費用 二千二百円

申込み 一月二十五日迄事務局へ

◎囲炉りを囲んで新年を迎える会

日時 十二月二十九日(一)月五日

場所 福島県耶麻郡高郷山荘

料金 冬期間 一泊 千三百円

申込み先 高郷村役場企画課

電話 〇二四一—四四—二一一一

夜間 伊藤尊仁

〇二四一—四四—二一二四

山荘より車で十分、村営雷神山スキ
 ー場に夜間照明も完成、田舎のお正月
 を地元の人達と味わってみて下さい。

訂正 七月号(五二九号) 九頁上か
 ら十人目伊藤幸太郎氏の住所が京都市
 左京区→右京区

十月号(五三二号) 八頁四段後から
 六行目 岡村治彦→岡村治信
 十頁自然保護随想下段一行目 …を思
 わせるV字谷…↓を思わせるU字谷…
 の誤りにつきそれぞれ訂正いたします

平成元年十二月二十日
 102 東京都千代田区四番町五一四
 サンビニウハイツ四番町

発行所 社団法人 日本山岳会

発行者 山田 二郎

編集代表 小倉 厚

電話 東京(261)四四三三

振替口座 東京三—四八二九番

東京都港区赤坂一—三—六
 赤坂グレースビル

印刷所 株式会社 技報堂